

創刊号（1955年3月）

創刊にあたって
松本文助

「汝らを誣ふ者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ」（ルカ六、二八）との聖言は理想の如く感じていた。そして之は傳道の如き場合に迫害を受けたとき、このような態度をとるべきであると考えていた。

然し、この世的の關係に於ては自分で正当であるとおもうことに、他からの非難攻??を受けると、反駁や弁明や或はその不当をせめようとして昂奮する。果てには実力でも行使しない限り解決が出来ないかの如くまで思いつめるのであった。殊に相手が教会人の如き場合はイエスに対するあの学者パリサイ人の理不盡なこと、それと同じであることを指摘して、やりこめようとばかりおもしろい、自分の矛盾には少しも氣付かずにいた。

最近、またある事件に対し例の様に考え始め仕事のとき勉強のとき執念深くおもしろい出していた。

ある夜の祈の時であつた。祈の中にそのことをも祈らんとした。そのとき「敵の為に祈れ」との声が心に響いた。私は祈り始めた。所が実に不思議なことに、心は一変し何とも云えないほゝえみさえ感じはじめた。一点のわだかまりもない爽快さであつた。心の眼から鱗のごときものが落ちた。そして愛が敵に対する唯一無二の武器であること知つたのである。

冒頭の聖言は私の血となつた。敵を愛することだ。本当に愛することだ。理屈でも実力でもない愛することだ。愛のみがこの世のすべてを浄化するのだ。神はその独子を賜うほどに世を愛し給うたのである。（ヨハネ三、一六）独子イエスは神の御心にたゞ従つて己が身を十字架に釘打たれたのである。愛である。愛である。コリント前書の記者の書かれた信仰と希望と愛とこの三つの中最も大なるは愛であるとは実にアーメンである。水戸無教会誌の発刊もまた愛の発露でなければならない。進まんかな。教友よ。同志よ。愛のシンボル十字架を負うて。

第二号創刊号（1955年4月）

弟子と使徒
半田梅雄

福音書に於けるイエスの弟子たちと、使徒行伝二章以下に於ける使徒たちの關係を知ることは、今日の社会に於ける牧師、宣教師その他伝道を職とする者と、平信徒との關係を知る上に極めて重要なことゝ思う。

先ず使徒について考えてみると、彼らはイエスの生存中からの弟子であつた。然し彼らが本当に信仰者としてイエス・キリストの証明を行えるように力強くなつたのは彼らに聖靈が降つてから後のことである。

聖霊が与えられる前と後の重要な変化は、弟子と使徒という表現がよくこれを物語るように思う。福音書にあらわれる彼らは弟子であつて、この世に於ける先生と生徒の関係という匂いが非常に強く、その力も甚だ弱い。ところが使徒行伝は文字通り使徒(apostle)の伝記であつて、別名聖霊行伝というにふさわしく、一人々々が神によつて召され、神によつて遣わされたものとして大なる働きをなしている。

使徒の原語απόστολοςはἀποστέλλωなる動詞より出た名詞であつて、この動詞は「使者を遣る」を意味する。そればアポストロスに遣わされし人、使者、特使を意味する、即ちキリストより此世への使者、キリストの大使という意味である。内村ロマ書研究

このことは今日の教会に於て牧師や宣教師の云う事を聞いて洗礼を受け、聖さん式に列席する人々がすべて眞のクリスチャンであるということの意味しない。それは教会や教団に所属するという点で特定グループの一人であり、又その牧師宣教師から教えを受ける故にこの世的な意味で牧師宣教師の弟子ではあるかも知れないが、それは即キリストの使徒を意味しない。

我らは教会の門をくゞつたことがなく、洗礼も受けず聖さん式に列しないから牧師の弟子、宣教師の生徒ではないが、キリストによりすべての罪を赦され救われたものである。このことは全世界の人々が否というとも神はこれを是とし給う。然も罪のゆるしと共に我らは、聖霊によつてキリストの大使としての大任を与えられて、この世に遣わされたものとなつた。働かざるを得ないのは実にこの為である。感謝であり、光栄である。

第三号 (1955年5月)

マラナ・ター(主よ来りませ)

石原秀志

マラナ・ター(コリント前書一六・二二)

口語訳聖書にそのまゝ記されている此の僅か二語よりなる短かい言葉は、初代教会のキリスト者達の間用いられた挨拶の言葉であつたと考えられている。

我々の周囲では最も盛んに用いられる挨拶は季節や天候のことである。日本のように四季の移り変りがはつきりして居り、然も自然の変動の激しい風土にあつては、人々の関心が強く之等の事に向けられるのも致し方ない事であつた。

併し初代のキリスト者にあつては、此の様な自然の時とその遷移への関心よりも遙に勝つて歴史の時とその遷移に対する関心の方が重要な意味をもつていた。それはキリスト者にとつては第二の時を意味する。所で時が歴史のうちで眞に時となつたのはイエス・キリストが神の子として我等の間に来り給うたその日に始る。而して第一の「時」の到来したことを知る事を許された者は更に此の来るべき時、新しい時を待望のうちにもつ。迫害と苦難との唯中に福音信仰を貫こうとする初代キリスト者達にとつては、此の第二の時に対する希望と期待とが強くあつたことは当然としなければならない。

イエスが世に來り給うた時の御言は「神の國は近づけり、汝等悔改めて福音を信ぜよ」であつたが、今やパウロ達の時代は「我等の主の再び來り給う時は近づいた。汝等福音に確く立つて待望め」と言う激励の時であつた。「時の徴」を我等は明らかに知る事は出来ない。然し唯一つ明らかな事は、來りつゝある第二の時に向かつて我らが一歩々々歩みつゝあると言う事である。

その故に主イエス・キリストを着て、光の中を歩む事こそ我々の全存在をかけた信仰の告白でありたいと願う。

時また期は父おのれの權威のうちに置き給へば、汝らの知るべきにあらず。されど聖靈なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん(使徒行伝一・七～八)

第四号 (1955年6月)

信仰と宗教語—鍵はイエスが持つている—

半田梅雄

こゝにいう宗教語の範囲は一応キリスト教に限るが、未信時代の私が一番とまどい且とまどい近づき難い感じを持つたのは宗教特有の専門語である。例えば、奇蹟、聖靈、天国などは最も代表的な宗教語で、門外漢には甚だ解り悪い言葉であつた。それにやたら敬語が習慣的に用いられるのも鼻もちならぬ理由である。又私の知つた範囲の牧師さんは余りに丁重過ぎるので閉口した。勿論責むべき理由は私の方にあつたのだが、今信仰を与えられてみると、それらのすべてを身につけることが、クリスチャンに必要なことだとは考えられない。むしろそれらのすべてが不必要なものだと思う。キリスト教につきまとつている特殊な儀式や、礼拝や、専門語は、人が救はれる為にはむしろ無用なものである。我々は世俗から離れて特定の教団やグループに加入しなければならぬ義理も義務もない。又宗教語と敬語を上手に使つて立派な祈りをする必要もない。ただイエス・キリストのみにたづね求めてゆけばよい。イエスは私たちにとつて永久に変わる事のない眞の友であり、求める者には必ず肉眼では見る事の出来ない新しい別の世界を見せ、遂にはそこに住まわせてくれる人である。「新しい別の世界」即ち天国は、決して空の上にあるのではない。勿論地上に文化の華を咲かせる別称でもない。

私たちが、昨日と同様に勤めを持ち、昨夜同様家庭の仕事にいそしみながら、自分が全く別な眼をもたせられていることを驚くときが来る。その時、すべての謎は一ぺんに解けるのである。鍵はイエスが持つている。唯一人イエスのみが。「我は道なり、眞理なり、生命なり、我に由られでは誰にても父の御許にいたる者なし。」(ヨハネ伝一四・六)

第五号 (1955年7月)

人類をして肉の飢えを満たさしめよ
半田梅雄

最もよき師はその友にあらず、彼の正面にある敵である。今やキリスト者が直面する好敵手はマルキシズムである。マルキシズムの果すべき世界史的役割は無神論による徹底的現世主義である。飢える者を一人も地上より出すまいとする非凡なるヒューマニティが彼の理想であり、彼の最も得意とする武器である。この徹底的なる現世主義は、何人も反抗することを許さない人間存在の根基の如くに見える。然り彼はとうとうたる濁流の如く全世界を呑み盡さんとしている。それは決して一ソ連、一中国の中の、極く少数者の野望の如きものではない。その施策、その方法に若干の相違はあつても、よし又権力相奪戦によつて指導者交代が行われてもそれが直ちにマルキシズムの現世主義を揺ぶり倒すものでないことは明らかである。

何人も飢えることを欲しない。何人も圧迫され、逆いたげられることを欲しない。この逞しい人間の基本的欲求を満たすものである限り、全世界の原水爆を彼らの頭上に爆発すると威嚇しても、マルキシズムの進軍は益々熾烈に、愈々果敢に押し進められるであろう。

人類は進みつゝある。その目指す方向はしかと認識することは出来なくとも、何れにしても或方向にそのおびたゞしい犠牲を乗り越え？？進軍しつゝある。彼らは飢えたる狼の如く凄まじい咆哮をあげつゝ前進する。アメリカの富の如きは忽ちにして食い散らさるべき運命にあることは火を見るより明らかである。彼らは飢えている。彼らは肉に於て飢えている。決して霊と魂に飢えているのではない。飢えたる者に先ず飢えを満たさしめよ。然して次に来るべき我らの使命の重大さに凜然とせよ。人は遂に狼では終り得ない。必ず終りの日は来るであろう。かの日まで与えられたる尊き使命を完うする者は極めて少数であろう。されど神は必ず必要なる七千人を残し置くであろう。その日の栄光を思うて我らの胸ははり裂けんばかりである。

第六号（1955年8月）

信仰即行為
松本文助

今から十五年前に紀元二千六百年の大祝典が行われ、日本全土に記念事業が行われた。その記念事業の一つとして植樹が奨励されたので私は縣から樺の苗七本の配給を受けた。その内三本は運動場の北端垣根に添うて植えた。南側は広々とした運動場で日当たりがよく、冬は霜どけ一つしない場所なので三本共直径七寸位の太さとなつて、この炎暑に涼しい葉影をつくつている。処が他の四本の中の三本は戦災で焼かれ、残る一本は敷地の東南の角に、桧葉と一緒に境界線の目印になるようにと植えたのであつたが、いまだに腕の太さ位で細長いいかにも弱々しきものである。これは桧葉と雑居の故もあろうしまた周囲に大きな桧や杉があつて太陽の光線が充分に受けられない為

である。

この百と一の比以上の差違に深い感動を受けた。この差違の出来たことは確に太陽の光線を受ける差に比例するように考えられる。同時に私は信仰の秘密をさとり得たような気がする。イエスが『もし芥種子一粒ほどの信仰あらばこの山に「此処より彼処に移れ」と言うとも移らん、斯て汝ら能はぬこと無るべし』マタイ一七・二〇。芥種一粒ほどの小さな信仰さえあれば到底動かすことの出来ない山でも動かすことが出来、不可能と云うことがないのであると云うのである。然しこれはその人自身の力でないことは云うまでもない。信仰あらばである。この信仰こそ神の力がその信ずる者に働くからで結局神様御自身の力であるからである。

植物が太陽の光に依つて成長するごとく、私共も神の光を受けること即ち神を信ずることによつて成長発展があるのである。

放蕩息子が自己の非を悔いて父の家に帰つたときに生活が出来、僕となつて働く力も湧いてくる様に、神の懐に帰り神の愛に生きるときに私達自身に変化が始まる。力が生じ、行為となつて表われるのである。

信仰即行動である。

エホバ汝等のために

戦いたまはん

汝等は

静りて居るべし

(出エジプト記一四ノ一四)

第七号 (1955年9月)

晴無讃歌

半田梅雄

つゝましく、謙遜に
召されしものゝ深き自覚と
永遠に生きる生命の希望と
あふれくる??^{よろこび}悦
罪赦されし嗚咽
かくて重ねたる六一号
満五才の
「晴無」よ！
神の尊き僕「晴無」よ！
あなたが歩いて来た足跡に
見よ！
芽ぐみ、育ちつゝある
数々の新しき生命を、
武蔵野の原、

轟々と上り下りする爆音の
傍に、
一人は諄々と信仰の勝利を
語り、
霊峯不二の裾野に
朽ちざる若木は
陣地より強き根を張る。
磬梯の懐深く
阿寒の湖のほとり
かつて夷を攘ちし鹿島洋
人は食を求めて絶叫する時
彼は貧しき炉辺に
福音を語る。
或者は木椅子により
或者はベッドに
或者は子を寝かしつゝ
或者は眠る前の五分を
唯聖書に
唯キリストに
唯神のみ前に
み国の榮を祈り続ける。
間違つてもいゝ
うろたえてもいゝ
恥はすべて主が負い給う
たゞ信じ
たゞより頼め
幼きは幼きまゝに
代え難い使命を持つ
「晴無」
満五才
病者読み
病者語り
病者書き
病者刷る
あゝ
健康と富と権力におごれる
者よ
君は聞いたか
幸福こゝにあり
平和こゝにあり
死も威張るな

限りなき生命の進軍を
何者も阻むことは出来ぬ
栄光
永久に神にあれ
アーメン

「註」「晴無」晴嵐無教会誌、病床を唯キリストのみに生きる療養所の兄弟姉妹たちによる原稿・編集・印刷・発行の月刊二六頁の雑誌

第八号（1955年10月）

あきらめと希望
石原秀志

あきらめとは望みを棄てる事である。磯野のイスラエルの「私たちは飲み食いしようではないか。明日もわからぬいのちなのだ。」という呟きも、生の望みを棄てた人間のすてばちな態度であつた。凡そ人生をあきらめる時には、其処にある生は唯単なる慣習であり、死という未知なるものへの漠然たる恐怖である。

故に凡そ自覚的に生きようとする者は何等かの意味で希望に支えられる。原子力の威力の前にあきらめに近い恐れを抱きつゝ、尚その平和的利用に望みを繋ぎ、被圧迫民族や階級の惨めさと苦悩を知つて、あらゆる危険を冒しつゝ解放の日を目ざして戦を続ける。人間理性の窮極の勝利に彼等の根柢がおかれているのである。

それではキリスト教は一体希望を与えるであろうか、それともあきらめか。アメリカの黒人はキリスト教によつてその苦悩をあきらめる事を知つたと人は説く。しかしそれは「キリスト教」ではあつても、イエス・キリストの父なる神への信仰ではない。聖書の示す信仰は「望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認する事である」。

「望んでいる事がら」とはロマ書の記す如くに「神の栄光にあずかる事」である。そして被造物自身にもまたそのような栄光に入る希望が残されているとパウロは語つた。

人間の理性、人間の意志によつて支えられた希望も希望である。けれども福音－イエス・キリストに於ける神の愛－に生きるものの希望は、此の世と世にある人間とを全く新しく為し給う方に対する信頼によつて支えられた希望である。人間が人間や自然の支配者となる希望ではない。人間と共に全宇宙が新しくされる希望である。そして此の望みに生きる時に、望み得ないのに尚望み、途方にくれても行詰らない＝希望を失わないのである。

第九号（1955年11月）

クリスチャンの常識

半田梅雄

洗礼を受け、聖さん式に列し、日曜を聖日として教会にゆく。これがクリスチャンの生活である。黒服白カラーの特異な服装は神父の制服であり、尖った屋根と輝く十字架は教会堂の特色である。キリストの像、マリヤの像、説教台とオルガンは教会に必要な調度品である。柔和と謙遜は教役者に欠くことの出来ないポーズである。地位と財力のある信者は長老であり、政治力のある者は運営委員である。献金の多い者は尊敬せられ、程よい自負と適度な自己満足を伴う病人慰問と貧乏人救済事業、これがクリスチャンの生活であり、常識であるという。常識、常識、実に恐るべきは常識である。バチカン宮殿とローマ法王の権威は、彼とその側近がこれを維持しているのではない。実に全世界に何億というカトリック信徒の常識がこれを支えているのである。彼らはおのれの法王がケンランたる法衣をたとえば、平伏して彼の足に口づけする。日本のプロテスタントは多数決を持つて信仰告白を制定する。信條によつて信者であるか否かゞ定まり、多数決によつて何事も定められてゆく事が現代の常識らしい。

常識、常識、パリサイ人の常識より見れば、イエスの福音は神を売す言となり、割礼によつて人は救われないと叫ぶパウロはユダヤ人にとつて許し難き非常識家であつた。法王の絶対権は常識であつた時、これに反抗して立ち上つたルターは悪魔とされた。洗礼によらず、牧師によらず、教会によらず、たゞキリストを信ずる信仰のみによつて人は救われると内村鑑三が叫ぶ時、全日本の教会は異端に耳をかすなとそつぽを向いたのである。

常識、常識、常識こそ恐ろしい律法であり、我々の日常生活を安易に支えるかくれ蓑である。そこには発展はない。成長もない。あるものは生の習慣化と一つ覚えの無意味な反覆文である。無教会が無教会という名の教会なら、それは地に棄てられた塩に過ぎまい。

第十号 (1955年12月)

静かな所にて神は待ち給う

半田梅雄

例年の事ながら、クリスマスの祝に引きつゞいて、年末、年始の諸行事が始まる。年に一度という観念も手伝う故か、これらの行事にはいろいろな準備がされ、晴の一日又は数日を賑やかに過ごすことが習慣となつている。勿論これらの行事を通して、一年の締めくゝりとなし、思いを新にして再出発を期することも必要であろう。又日頃の疲れを医し、平素疎遠な人々と旧交を温めることも決して意味のないことではない。然し実際にはそうしたよい目的とは逆に、義理や慣習に縛られて、随分苦しいやりくりや、疲労の上塗りをしていることも??えない事実であろう。

その最大の原因は、変化と刺戟を求める方法が、享察と結びつくからである。人々は住居、衣服、飲食にいろいろ趣向をこらして、人間の官能を満足させることに全力

を盡している。クリスマスの馬鹿騒ぎに始まり、年末年始の贈答饗応、多様な催し、その上着飾って好んで人混みえ自分を見せびらかしにゆく。そして折角新鮮な気分で、仕事に移ろうとする頃はクタクタになつているのが落である。これでは何のことやらさつぱりわからない。

「さて旅行から帰った十二人の使徒たちはイエスの所に集まつて、したこと、教えたことをのこらず報告した。彼らに言われた。「さあ、あなた達だけどこか静かな所へ行つて、しばらく休んだがよかろう。」人の出入りが少く、食事する暇もなかつたのである。」マルコ六・三〇～三一

これは勿論年末にイエスが言われたことではない。然し一年の馳場を走り続けた者に、これ以上適切な慰めの言葉はないであろう。この一年、社会的にも国際的にも、人と人の織りなす青や赤や様々の此の世の炎に取り囲まれて、これとたゞかい乍ら私達は辛うじて年の瀬にたどりついた。何を好き好んで、更にこの上に無駄な苦勞を積み重ねる必要があるか。友よ！静かな所へ行こう。そこには無限の慈愛をこめて、父なる神が待ちたまうではないか。

第十一号（1956年1月）

ただ一つのもの

半田梅雄

三八一一同が旅を続けているうちに、イエスがある村へはいられた。するとマルタという名の女がイエスを家に迎え入れた。三九この女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわつて、御言みことばに聞き入っていた。四〇ところが、マルタは接待のことで忙しくて心をとりみだし、イエスのところにきて言った、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。私の手伝いをするように妹におっしゃってください」。四一主は答えて言われた、「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配つて思いわずらっている。四二しかし、無くてはならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去つてはならないものである」。(ルカ一〇章)

この記事から受けるイエスの教訓は、私たちがとかくこの世の事にかゝづらつて、一番大切なものを見失ひ勝であるから、マリヤのように一途に、熱心に、単刀直入に福音にのみ聞き入るべきだということであろう。然し最近になつて、私は、この記事の底知れない深さに益々怖れと驚きとを覚える。

イエスはマリヤの態度をほめておられるが、それは決して、接待より講義を聞く方がよいと、安易に比較的なもの言いをしているのではない。同様にマルタに対しても、接待など無用なことだ、こゝで聞いていなさいとは言つていないのである。イエスは、なくてはならぬものはたゞ一つだけだと言われる。即ちその一つを除けば、あとに山のような善行を積んでも、何の役にも立たないという、福音の根本義を、その場の事実にてらして単純明快に指摘されたのである。実に心憎いまでに鮮やかな表現である。

最初にイエスを家に招じ入れたのはマルタであり、接待のことで転倒する程気を使つたのもマルタである。してみるとマルタは実に積極的で、親切な、そしてイエスに対する敬慕も一通り以上のものを持つていたことがわかる。然し本当に大切なものを知らないで、どんなに熱心に、真心を傾けて親切を盡しても、恐ろしいことだが、それはやはり滅びにゆく。「マルタよ」「マルタよ」と二度呼びかけたイエスの眼が、どんなにマルタに対する愛に溢れていたか。更に「マリヤは良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去つてはならないものである」。と仰言る言には、やさしいが、実に凜として犯すことの出来ない義の厳しさが感じられる。まさに神の子にして始めて可能な權威に満ちた言である。

第十二号 (1956年3月)

十字架の決定(マタイ二七ノ一五～二六、マルコ一五ノ六～一五、ルカ二三ノ一七～二五)

半田梅雄

新約聖書によれば、イエスの十字架を強く要求したのは、ピラトの前に集まつた群集であつた。そしてこれをそゝのかしたのは、祭司長や長老達である。

憎悪の火種は群衆の中に落され、少しあほられると、途方もない惨酷、惨忍をあえて行ふ。これは恐らく平素抑圧されている何ものかえの反撥が、憎悪と結びついて爆発するからであろう。群集は彼らの演ずる役割がどんなものであるか殆んど知らない。野獣に似た狂暴性はふれる相手を滅茶々にしないうちはおさまらないのである。何時の時代でも、扇動者はこの祭司長や長老たちの陰険さを持つている。彼らは自己の権力の座を獲保つ為にあらゆる智慧をしばつて群集を利用する。

しかし私たちが深く心にとめなければならないのは、この時のイエスの立場と態度である。イエスがそのような立場に追い込まれる前に、これを防ぐことが不可能であつたとは考えられない。又適当な妥協によつて、時の権力と結びつき、群集を彼の意図する方向に導く術がないわけではなかつたであろう。然るに彼はその何れにもよらず、人の常識よりみれば、最も馬鹿正直な珠算に合わない道えあえて進まれたのである。然も彼の態度には、英雄的な豪放さも、殉教者の如き悲壮ささえもみえなかつた。イエスが三年の伝道生活の中で最も愛したのは、彼ら飼うものなき群集ではなかつたか。その愛する羊たちが、今狼となつて、自分を十字架につけよと叫ぶ。イエスはじつと眼をつむつた。祭司長と群集にどれ丈差があるか。群集が権力の座につく時、それは祭司長となり、祭司長、長老らから地位と若干の知識を取り去ればそれは群衆になるのである。所詮人間は父から離れた罪の子である。彼らは今得々と祭司長を演じ、長老を演じ、群集を演じている。それが悪魔におどらされて、滅亡えの墓穴を掘つてゐることに気がつかない。最早この愚かさから彼らを救う道は唯一つしかない。それは人類の長き悪夢に止めをさす非常手段である。

十字架は用意された。イエスは厳しい父のみ顔の前に立たれた。すべての苦難と屈辱と絶望とが彼の上に置かれた。今や暗黒は頂点に達し、宇宙は窒息しかけていた。

然し、見よ一かの聖なる聖なる^{いけにえ}犠牲の口から洩れた言葉は何であつたか。「父よ、彼らを許して下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」かくてこの世の歴史は幕を閉じた。然しすべてが終つたのではない。イエスの死は、死としての意味より、彼が眞の支配者として登上する準備の時に外ならなかつた。死を越えた福音は、イエスの眞実を語り続け、選びは間断なく行われる。選ばれた者は、誰はゞかるところなく、全能者を父と呼ぶことが可能となつたのである。

第十三号（1956年5月）

引っ込んでろ、^{サタン}悪魔

半田梅雄

待望久しかつた塚本先生の口語新約聖書第二分冊が世に出た。これでルカの一部を残して共観福音書マルコ、マタイ、ルカを本当の口語によつて自由に勉強が出来るようになったことは限りないよろこびであり、感謝である。この改訳第二分冊を手にとって、マタイ四の十にある「引っ込んでろ、^{サタン}悪魔」に眼にふれた時、いきなり電氣にふれて飛び上つたような驚きを覚えた。それは目の前にイエス様が居られて、この言葉をこの耳で直かに聞いたような鮮かな印象であつた。何というすばらしい日本語であろう。然もこの言葉が四十日四十夜の断食の後、空腹という絶対的生理現象の間隙に近よつてきた悪魔の三大誘惑に対して、イエス様が最後に発せられたものである文にその意味と語氣と態度は強烈な響きをもつて迫つてくる。聖書は神の言であり、生きた生命の言葉である。そのことは既に云い盡され、且信ずるすべての者に眞理であろう。だが本当の意味でイエス様がユダヤの街で人々に語つたような状態で私たちはこれを読むことが出来なかつた。

生きているということは、イエス様が今の日本人であり、今の日本語で私たちに語つて下さることである。

因みにここのところは古い訳では「サタンよ、退け」聖書協会の口語訳も同様の「サタンよ、退け。」であり、キリスト新聞社のは「退れ、サタンよ、」となつていて何れも今の日本の話し言葉ではない。それがそれぞれの訳の特徴と限界を示すものなら、塚本訳が世に出た意義はまことにはかり難い神の恩恵と云わなければならない。

日本人が、日本人のイエスから、生きた日本語で福音を聞く、これ以上の幸福はまたとあるまい。このことは、英語国民が現代英語をもつて、ロシア人が現代ロシア語をもつて福音を聞くチャンスが与えられることを裏書きすることにならう。この意味から廿世紀は原子力をもつた以上に特徴ある世紀と呼ばれてよいであろう。

尚マタイ四の荒野の誘惑の中で、古い訳で有名な「人の生くるはパンのみにあらず」は協会訳「人はパンだけで生きるものではなく」キリスト新聞訳「人はパンのみによらずに」に対して「パンがなくても人は生きられる」となつて著しい特徴を示している。原語についてくわしい知識のない私たちには今直ちにかれこれ云えないが、聖書の言が訳し方によつて違うこと、まして個々の解釈に千差万別のあることは凡そ想像

出来ると思う。勿論曲解や誤訳はいけないが、たつた一つの真理が、万人万様に生かされるその無限の中と深さに対して驚嘆しないものは、“信仰のみで人は救われる”ことを信じていないのである。

第十四号（1956年6月）

イエスに失望した人々－命のパン－
半田梅雄

ヨハネ福音書、六章に五千人のパンの奇蹟(他の三福音書共通)があるが、これに続いて、群衆とイエスのパン問答がある。イエスは「わたしは命のパンである。あなたの方の先祖は、荒野でマナを食べたが死んでしまった。しかし天から下つたパンを食べる人は、決して死ぬことはない。わたしは天から下つてきた生きたパンである。それを食べるものは、いつまでも生きるであろう。...」と云われた。これに対して人々は「この人はどうして、自分の肉をわたしたちに与えて、食べさせることができようか、」と論じあつた。「よく云つておく。人の子の肉を食べず、また血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない...云々」これには弟子たちのうち多くの者も驚いたらしく、「これはひどい言葉だ。だれがそんなこと聞いておられようか」とつぶやきあつた。イエスはこれを見破つて更に云われた。「人を生かすものは霊であつて、肉は何の役にも立たない。私があるあなた方に話した言葉は霊であり、また命である...」「それだから父が与えて下さつたものでなければ、わたしに来ることはできないと云つたのである。」

それ以来、多くの弟子たちは去つていつて、もはやイエスと行動を共にしなかつた。そこでイエスは十二弟子に云われた。「あなた方も去ろうとするのか」

こゝに私たちはキリスト教の現世との交渉をその結末について典型的な失敗事例を見るであろう。外ならぬイエス御自身の伝道に於て、かくの如き美事な失敗が、ここにはある。

そしてキリスト教の本質と人間の罪(目指す方向)とを考えあわせれば、これは又実に止むを得ない当然の帰結と云えるのである。何故なら多くの人々の求めているのは外ならぬ肉のパンであり、現世の繁栄であるからである。

この世の生活の不満や不足をキリスト教によつて補つて貰おうとする人たちは、今もイエスにつまづき、イエスと行動を共にしなくなる人々が、毎日出たとしても怪しむに足りない。

唯私たちは強く深く思う。「人を生かすものは霊であつて、肉は何の役にも立たない」と。そして「あなた方も去ろうとするのか」とイエス様に声をかけられるものにならぬように切にいのるのである。

第十五号（1956年9月）

ころげ落ちる

半田梅雄

人がキリストに至る為の有力な手がかりは、イエスが眞の人生に御自身を示していることである。もちろん、それは我々と併列的な道德の師ということではない。イエスは努力によつてだんだん登つてゆく人格の階段の、途中にも頂上にもいない。人はむしろ、登りかけてはころげ落ち、登りかけてはころげ落ちしているうちに、遂に足腰立たなくなつた時、ふと振り向くとそこに立つている一人の人を見るであろう。それがイエスである。彼はいきなりそのイエスの足にしがみついてしまう。そしてイエスの立つている場所に立つてみる。それは父なる神の国の大地である。もうころげ落ちようのないところである。そこはひろく平かである。そこには不思議と疲れがない。

彼はイエスがしたように、階段のところについて立つてみる。今まで気がつかなかつたが、そこには凄まじい光景が展開されている。

人々は押しあいへしあい一々でも他人より高く登ろうとする。人の足を引張つて引づり下ろそうとしているかと思うと、他方では人をけ落すことで懸命な者、甚い奴は人の頭を踏台にして登りかけている者がある。小さな子供、病人、老人も今はもうしがみついている文で精一ぱい。怨み、のろい、叫び、実にじつと見るに耐え難い光景である。半分程落ちかけた者は、イエスや救われた者たちに向つてこう叫ぶ。「手を引っぱつてくれ、私は一人で階段が登れないのだ」と。

しかし、そんなことを言つたつて無駄である。イエスは階段を登ることを断念した者の為に来たのだから。

ところが人の世の教師の中には、こういう登山者の尻を押したり、手を引っぱつたりして、それがキリストの国に近づくことだと思つている者がある。彼はその人もろとも最後にころげ落ちて、滅びに至ることを知らないのである。

第十六号（1956年11月）

ひとすぢの道 ー来信ー

去る九月十七日夕方ラジオ婦人の時間で午後一時より「ひとすぢの道」内村鑑三、を山本安英さんの朗読で聞かせていただきました。武士気質の生粹のサムライの家に生れ、鑑三の血管には生くことは戦うことなり、とのすさまじい闘魂と、生くことは働くことなり、との勤労と平和と静肅とを愛する血を受けて生れたこと。

二十四才の時離婚の心の痛手と靈魂の悩みにアメリカへ渡り白痴兒童の看護夫として働き、併し慈善事業は放蕩息子の梅毒をいやすようなもので彼を救つてはくれなかつたと。又洗礼を受けてから七年、やつと人は修養や善行で救われるのではない、キ

リストを信じキリストを仰いで救われるのであることがわかり、彼は救われ、生まれ変わり、平安を得、悲嘆懊悩は消えて歎喜と希望の人となつたこと。又ハートフォード神学校に入学したが、神学校と神学生の生活がいたく彼を失望させキリストの福音を信じて生きようとする者につては、神学について読むことが少なければ少いだけそれだけよい事を痛感して、居ること僅か四ヶ月、惜し気もなく学校をすて、直ちに帰国したこと。

それからは国粹的保守主義者でも、反動的愛国論者でもない、彼はユニークなキリスト教愛国者としてユニークな思想と立場とを取つて日本自身の東洋流の衣をまとうて日本自身の国土にはえ出ざるキリスト教たらしめたこと。

それ以後は中学校不敬事件、加寿子夫人の死、国賊と呼ばれ、妻に死別し職に追われてあてもなくさまよつたこと、エリ、エリ、ラマサバクタニ、神よ汝、いまし給はざるやと。併し書をかくことに専念し幾多の迫害と戦いながら、今は、世界の人、ひとすぢの道を生き通した人であると。そして御長男様や美代子夫人の御声、先生と親しく接した人々、又最後に心臓病の看護にあたられた君方道子様のお声など聞かせていたゞき唯々胸が熱くなるばかりで御座いました内村先生は最後に看護の方に言われた相です。

世間の人には偉人というであろう、しかし自分は十字架にすぎた幼子にすぎなかつたと。讚美歌をうたっている人の中で何人このことがわかるであろうと七十才の幼子はねむるが如くその魂を神の胸にゆだねたと。

それ以後私は実に内村先生を尊敬する様になりました。神の最上の私への送りもの、と胸に手をあてゝ神の恵みを心におし抱きました。今内村先生がベルに書き送つた二十八才から六十七才までの自叙伝的書翰集を読ませていたゞいて居ります。羽根を失つた鳥、鳥としての性能をすっかりもぎとられてしまった小鳥にも神の愛は日一日とあたゝかくなぐさめはぐくんで下さいます。神こそはすべてのものを生かして下さることを私は心から信じます。

水戸Y姉より

第十七号（1957年1月）

恐れと歎喜

石原秀志

神の御子イエスよ

天の御座を下つてあなたが我等の間に来り給うた時

力強き主の栄光の前に

誰か恐れを覚えずにあり得たであろうか

あなたの強烈な光の前に

我等の醜さと汚れとがありありと照し出される時に

その傷とその陰影とを見出す事は
何という恐懼であり、苦痛である事か

されど主よ
その傷を包み、その病患を医すべく
我等の呻きの唯中に来り給うたあなたの御顔の
如何に深き柔和と愛とを湛え給う事よ

あなたによって始めて
新しい光 恩恵と眞理とが全地を和かく包む時に
その輝きとその温かみとは
凡ての暗黒と寒さと孤独との中にあるたましいに
まことの生命の訪れである

願くば主よ
あらゆる懼れとためらいとにも拘らず
凡ての重荷を投げすてまっしぐらに
あなたの憐憫と恩恵との御座に迄来たらしめ

その為に来り、その為に死に給い
その為に甦り、その為に凱旋し給うた
あなたのかぎりなき生命の唯中に
この貧しさの底にあるたましいを委ねまつる事を
得しめ給え

第十八号 (1957年7月)

社会主義とキリスト教 ー一番上になりたいものは一番下になれー(マルコ九の三五)
半田梅雄

極く素朴な皮相な見方かも知れないが、社会主義(資本主義はなおのこと)の眼ざす方向は、あくまでこの世の幸福に盡きている。そして、それは、個人よりも集団を尊重する。社会全体への奉仕、あるいは必要のためなら、個人を犠牲にすることを辞さない合理的非情主義であるとも言える。“生命への畏敬”“創造の神秘への限りなき憧憬”“存在するすべてのものへの謙虚な容認”等々は、ここからは生れて来ない。なるほど社会の不合理、矛盾とのたゞかいを通しての理想主義、あるいはこれを克服するための犠牲的精神もこゝにはある。しかし、彼の理想は、自己を含めた全体の繁栄にあつても、奉仕そのもの、犠牲そのものが究極的な価値を持つとは考えていないらしくある。

「一番上になりたいものは一番下になれ、みなを召使になれ」(マルコ九の三五)

「あなた達が知つているように、世間では主権者が人民を支配し、またいわゆる偉人が権力をふるうのである。あなた達の間では、そうであつてはならない。あなた達の間では、えらくならないものは召使になれ、一番上になりたいものは奴隷になれ、人の子私が来たのも仕えられる為ではない。仕えるため、多くの人の贖金としてその命を与えるためである」(マタイ二〇の二五～二八)

このようにイエスは言われた。イエスのいう偉い人は仕える人であつて、支配する人ではない。贖金として多くの人に命を与えることが、そのまゝ価値あることであり、使命であり歓喜である。ところが社会主義者の犠牲はこれとは全く違う。人は本来幸福であるべきだという理想主義の段階ではそうはつきりしないが、幸福の内容はキリストのそれとは明らかに違う。犠牲も奉仕も幸福の内容とはならない。彼は人の上に立つことを名誉とし、物質的に繁栄することを幸福の内容とし、努力の目標とする。だから彼の今行う犠牲は、止むを得ず、仕方なしに行う、目的を達するための手段である。手段である以上、変更されることは一向さしつかえないし、その期間や範囲はできるだけ短かく、狭い方がよいのである。従つて、多数の幸福のための犠牲者は多数と共に受くべき幸福を受けず、名誉ある高い地位につくことがなかつた為に、多数者から同情され、生前受けべき幸福の象徴たる花輪と讃美を墓前に捧げられるのである。

イエスはちょうどその反対のことを言い、且つ為した。イエスはこの世に報酬を求めなかつた。勿論その必要もなかつた。彼の死は人に仕えるためであり、それは同時に神に仕えることであつた。仕えること(つまり犠牲になること)がそのまま彼が世に来たすべての意味であり使命であつたからである。

「我にならえ」とイエスは弟子たちに言われた。だから、彼の弟子であるすべてのキリスト者にとつて、今犠牲の如く見える生活は、実はそのまゝ彼が世に生かされている最高の意義であり価値なのである。しかも、すべてのキリスト者にとつて、犠牲はもうない。犠牲になつたのはイエスであつて、彼の十字架を除いて真の意味の犠牲は終つたのである。彼等は自分の魂をよろこばせ、自分を幸福に導く道は奉仕すること自身であつて、奉仕の結果として報酬をもらうことではななことこ??ないこと??を知っている。

では現実に社会主義者は、止むを得ない犠牲と奉仕を、いやいや行つているのだろうか。必ずしもすべての者がそうではないのであろう。犠牲と奉仕には、それ自身にともなう満足感があるとある者は言う。それが彼らの発見した犠牲と奉仕への唯一の讃美であつたらしくある。しょせんこの世の富と繁栄にしか目標を持つことのできない者のかなしい帰着点というほかないであらう。

結果から見ると、自己の魂の求めに忠実なキリスト者が、真の意味の奉仕者となり、社会とか民衆とか全体本位の筈の社会主義者が、逆に利己的あるいは富への隷従懸命になつて追つていることに気がつくであらう。

「一番上になりたいものは一番下になれ」このイエスの言葉のパラドクス(逆説)の深い真理よ。耳ある者は聞くべし。

第十九号（1957年10月）

神の存在について —石原兵永先生講演筆記—

<まえがき> 次の文は去る七月十三日、水戸市医師会館において午後七時半より約一時間にわたってなされました石原先生の一般公開、御講演をノートによつて整理したものです。できるだけ忠実に整理したのですが、ノートが極めて不完全でありますので、本文に関する責任は一切、整理者たる私にありますことを特に申添えておきたいと思ひます。

(大森孝夫)

- 今晚は「神の存在について」という題であります。皆さんはすでに神を信じておられる方が多い。それで「神の存在」についてこれからお話する必要を認めないかもしれません。

然し全国各地や東京で伝導をしておりますと「神の存在がわからない」という質問をしばしば受けるのです。先日もY・W・C・Aの学生に宗教問題について自分の思うことを率直に書いてもらいました。それによると「はつきりと神を信じている」という人が二人、「絶対に神を信じない」という人も二人。そしてその間はいろいろな段階をもつて「信じたいと思う」とか「キリストの教を尊敬する」とか、種々ありましたが、その中に「自分は神を信じたいが、つかむことが出来ない」という人がありました。これはほんの一例に過ぎませんがとにかく、多くの人は、はつきりと神の存在を知りたい、そして信じていきたいと希望しているように思われます。そこで今晚は私自身がどうして神を信じているかということ、つまり「神の存在」を私の実験に訴え、知識に訴えて考えてみたいと思うのです。一般に、人間の五官に直接、感じられないから神を信じられないとか、或は信仰といったような事柄は私の理性が許さない問題だとか、種々いろいろ意見はあるでしょうが、はたして神の信仰といったような問題は我々の理性に受入れにくいことなのでしょう。皆さんも時にはかかる点について反省されてみるのもよいことと思ひます。

- ところで「神は存在するか」と簡単な意味に於て問われますならば、「神は存在しない」とお答えする外はありません。なぜなら神は富士山や、月や星や人間或いは家屋とかが存在するような意味では存在しないからです。即ち宇宙万物の中の一物体として神は決して存在しないのです。かつてある有名な天文学者は「神は存在しない。なぜなら私は長い間望遠鏡で空を見ているが一度も神を見たことはない」と申しましたが、神は天地万物の中の一つとしては決して存在しません。昔は、星の神とか、山の神とか称して、人間は天然物を神として崇拜しましたが、かかることは自然崇拜、偶像崇拜でありまして、聖書に於てはモーセの十誡中の第一、第二条によつて断然、拒否されておるようによつて我々の崇拜の対象とはならないのです。

「世界の中に神が存在するのではない。神の中に世界が存在する。」とはエミール・ブルンナーの言であります。一体に、この宇宙の中で「私」という存在が一番偉いも

のではないということは時間的空間的にいつて極めてはつきりした事柄です。如何に人間偉なりといえども人間は地球の微小な一角に位置を占めているに過ぎず、地球は遙かに広大である。しかし地球如何に広大なりと言うも太陽系の中の一存在に過ぎない。そしてその太陽系すらも更に広大な空間中に含まれているのです。かかる例からみても我々の外にもつと、もつと偉大なものが存在するのは当然であるならば、ここに宇宙万物を超えたる存在が実在することは確かです。

absolute reality、即ち「絶対の実在」の存することを古今東西の哲学者たちは考えましたが、これは当然であり、世界は神によつて作られたものであるということは理性に訴えてみても明らかであると思います。絶対の実在に対する直感は今東西、共通にあります。この直感を最も正確、最も端的に示したものが聖書であります。即ち旧約聖書の冒頭、創世記第一章一節には「元始に神天地を創造たまへり」とあります。これは宇宙万物の中に神さまがあるのではなく、神さまの中に宇宙万物が創造されたのであると述べ、見えざる神とつくられた見える世界、神と宇宙万物の関係を最も深くあらわしたものでありましてかかる観点から考えれば、神は絶対に存在し給うとともに神は存在の根源であり理性と矛盾しないのであります。ところで近代哲学は以上と全く反対に、人間がすべてのものの中で最高の存在なりといいますが、これは誤りであり、人間が最高のものでないことはすぐわかる筈であります。

ルカ伝十二章十三節以下をみますとイエスのたとえが出ております。これはあるところに金持があつて、ある年、作物をどこにしまつてよいかわからない程の豊作になつた。金持はすつかり、おごりたかぶり「今の倉を取りこわして、もつと大きいのを建てよう。そして大いに楽しもうぞ。それ、食べ、飲め、楽しめだ」と申しました。するとその時、神はおごそかに言われたのです。「愚かな者よ、おごりたかぶれどお前の命は今夜のうちに取り去られるのだ。そうしたならばお前の用意したもの、お前の所有物はいつたいどうなるのか」...イエスのお話はこういつた筋であります。このたとえからもわかりますように人間は自分の生命を支配していない。人間は出生ということから死というこの短い存在に於て制限されているのです。生命をとられるのは、とるものがあるからであつて人間が最高のものでないことは明らかです。つまり人間が最高の存在であるということは理性に合致せざることであり、「神天地を創造たまへり」ということこそ、全く正しいことなのであります。

● 次に第二の点としましては、たとえば神が宇宙万物を超えたる存在ということがわかつたとしてもその存在の証明はどうするかという問題であります。然しその解答は既にあります。それは我々の外に存在している宇宙万物が神の証明を力強く示しているということです。旧約聖書、詩篇十九篇の中に「もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼おおぞらはそのみ手のわざをしめす」とありますが、これは宇宙万物そのものが神による宇宙万物の創造を、換言するならば宇宙万物が神の存在する証明を端的に、力強く示しているのだということであり、大空は、星は、太陽は神のつくり給うたものであつて偶然とか、でたらめにできたものではない。もろもろの天体は神のその創造のすばらしさをはつきりと示しているのではないかとこの旧約の詩人はうたいましたが、旧約の詩人ばかりでなくイギリスのアジソンという詩人も同様に、瞬時も休まずしか

も規則正しく、整然と運行を続けている天体こそ神の創造の偉大さ、美しさ、崇厳さを讃美しているのだとうたいました。

しかし天体ばかりでなく神のつくり給うた宇宙万物は神の存在を示しているのです。たとえばいいますならばこれはミケランジェロ自身がそこに居らなくとも、我々はミケランジェロの彫刻をみればミケランジェロというすぐれた芸術家の存在を知る。つまりミケランジェロの彫刻はミケランジェロという人格の存在を示すのと同様でありまして我々も詩人たちと同じく宇宙万物をみて神の存在を知ることができるのです。ところで近代科学は極めて実証的となり化学は唯物主義のようにいわれ世の中には、科学即唯物主義といった考が存在しています。ヘーゲル以後フオィエルバッハを経てマルクスに至る一種の考え、学説は一見、科学的に見えますが真の科学的精神に照らしてみたとき、飛躍があり、全く独断的であります。

近代科学とか唯物論は極めて科学的なることを誇るが、それらは我々の頭と手と物の実験によつて物を証明しているに過ぎない。頭脳、手を通していくつかの計算がなされるが、それらは正確か、絶対か、科学的か。つまり我々の頭脳などは絶対に正確であり誤りが無いと言っているのですか。

神は存在しないといつて神への信仰を否定すると共に自分たちに一切の信仰など必要がない、自分たちはただ宇宙のあるがままを研究しているのだという科学者や学説は間違っています。独断です。実に科学的真理が成り立つためには宇宙万物あらゆるものの根柢に絶対の真理が存在すると信じなければなりません。また人間の頭や手乃至は道具等は正しく、これらによつて必ず我々は真理に到達できるのだと信じていかねばなりません。

これは一種の信仰です。そして科学はこれら一種の振興の上にたつてこそはじめて成立可能であり発展があるのです。しかし私は更に深く考えますときに科学の存在と発展は「元始に神天地を創造たまへり」という信仰にあると思うのです。即ち全智全能なる絶対の神が存在され、この神によつて天地万物が創造されたからこそ、天体の運行が精密であり宇宙間に調和があるのだと考えるのですが、これは迷信でしょうか。むしろ私は神はなく宇宙万物は偶然に、でたらめにでき上つたんだということこそ、迷信であると思います。宇宙万物の美しさ、正確さは神の存在を証明しているのです。皆さんは土中深くにあるセミの幼虫がどのようにして地面にはい上るか、その方法をごぞんじですか。ファーブルはこれを観察し、あの有名な「昆虫記」中次のように述べています。つまりセミの幼虫は湿気のある土中におりその土中の水分を体内に吸収した上で自分の掘つた穴の土とそれとを混合して泥をつくるのです。このとき泥になつたため土の体積は減り、少しく空間ができますからその泥をできたその穴の周囲にぬつてかため、だんだんトンネルを作つていき地面近くに進出していく訳です。もし水分のない場所にあえば水分のあるところまで戻つて来てそれを体内に入れ再び泥をつくり上げる訳です。そして最後に地上の天候の良し悪しを見とどけた上で地上に姿を現わし脱皮するのであります。この土木技術者まかしのトンネル作りと气象台より正確な天気判断。本能といえども本能かも知れませんが、これは非常な驚異です。如何なる科学技術者といえども授けることのできない智慧を小さなたつた一匹のセミがもつているのです。これは一体どなたが授けられたのでしょうか。

バラという植物に着目してもバラの種子の中には、その形も葉もありません。しか

しやがてバラ独特の美しい花や葉を出すのです。私達はバラの生命の素晴らしさを感じずにおられません。実に不思議です。加えて人間の出生の問題も全く驚異であり神秘であります。

実に、心してみればわかるように宇宙万物の存在そのものが奇蹟であります。まことにこれは宇宙の万物は神さまによつて創造され、神さまはセミにはセミらしく、バラにはバラらしく、人間には人間らしくそれぞれに与えられた生命にふさわしくはたらき給うたのであると申す外はありません。神さまはイエスさまが、「わたしの父は今に至るまで働いておられる」(ヨハネ五 17)といわれましたように、我々の上に、いまもはたらいていらつしやるのであります。そしてこのように神さまがおつくり下さったからこそ「私」という存在は絶対にかけがえのない存在であります。よしやかのマルチン・ルッターが何人あつまろうと、また内村鑑三が幾人よろうとこの石原兵水個人にはなれないのです。

ロマ書一章二十節には「それ神の見るべからざる永遠の能力と神性とは造られたる物により世の創^{はじめ}より悟りえて明かに見るべければ、彼ら言い遁る術なし」とあります。神は見えません。然し神は宇宙万物をつくられました。そしてこの宇宙万物は世のはじめより神の永遠の力と神性とを示しているのでありますから本当に謙虚になつて宇宙の万物そのものをみれば神の存在がわかる筈であります。神は見えないから存在しないといつて言いがれることは許されません。

神在し給う証拠はつくられたもののなかにあるのです。アルプスの高峯に登山した人々が、大自然の驚異、神秘に打たれておそれおののいたという記録を読まずとも、まさに太陽の没せんとする時の崇高、厳粛壯絶なる光景、或は万里の波濤の押し寄せくる雄大なる大海原や天然自然の絶景をごらん下さい。これらこそ百の説教、学説にまさつて雄辯に神の栄光、神の存在を示すものでなくてなんでありましょうか。

● 次に第三番目としまして、更に別の観点からの「神の存在」の確実な証拠はないかどうかを考えてみたいと思います。私はこの点につきまして「神の存在」の証拠を人間の内面的な魂の問題つまり良心の存在といつた点にみる事が出来ると思つております。私そのものが私と言う人間の中で最も本質的なものであります。その私そのものの中に良心と言うものが存在しており私はそれによつて善なることを知るのであります。私たちが悪いことをいたしますと、それはいけないと教える声がどこからか聞えて参ります。良心は私たちの魂の中にありますがそれは私たちを超えているものであります。本来、私たちは罪を犯すべきではありません。しかるに私たちは罪を犯してしまうのです。パウロはロマ書七章の中でこの自分の苦しい、苦しい体験を「わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の悪は之をなすなり。我もし欲せぬ所の事をなさば、之を行うは我にあらず、我の中に宿る罪なり。然れば善をなさんと欲する我に悪ありとの法を我見出せり。…噫われ悩める人なるかな。此の死の体より我を救はん者は誰ぞ」と切々と述べているのです。

罪を自覚せしめるものはなんでしようか。それは良心です。良心は絶対の権威を以て我々を支配しています。が果たしてこの良心はどこからきたのでしようか。誰がこの良心を人間に与えたのでしようか。

創世記は「神其像の如くに人を創造たまえり」(一・27)と記しております。そしてマルコ伝十章十七節以下には、ある富める人がイエスに対し「善き師よ。永遠の生命を嗣ぐためには、我なにを為すべきか」と問いましたところ、イエスが「なにゆえ、我を善しと言うか、神ひとりの他に善き者なし...」と答えられたという記事があります。これらの天からみまして私たちは良心は神が与えられたもの、神から命じられて存在しているものであることがわかります。そして更に重要なことは私たちの良心というものが神の絶対的な善に支えられていると考えられるときに道徳に信頼がおける、換言すれば神が存在して神の絶対善に支えられて良心があると信ずるときに人ははじめて人間世界の眞の正邪、善悪の判断がなされるのであります。

良心は環境によつて作られたものであつて、社会の習慣や利益経験の反映であるかの如く考え、よく資本主義の良心とか共産主義の良心とか申しまして良心にも何種類かあるかのようにいう人々があります。しかしそれは大いなる誤りであります。人間の社会の中で良心が製造されるものであれば、絶対の良心・正義はどこにあるかわからなくなり、正邪に信頼がおけず人々は不安と混乱にさらされてしまいます。ペリヤが消え失せさせられたかと思うと、次に追払つた張本人のマレンコフがけしからん奴、人民の敵として失脚させられるといつた具合のソ連の状況を見てごらん下さい。神のない人間が、最高、最善の存在であると主張し、その人間の手によつてそお時々の人間社会の状況変化に伴い、正義と良心の標準が変えられてゆくならばなにを中心として人間は生きていくことができるのでしょうか。

神を信ぜざる社会は虚無と混乱の社会であります。我々が安心し、信頼して生きていける、しかも絶対に正しく、善き生涯を送ることができるのは神の存在を確信し「善きものは神のみ」という信仰に支えられてであります。そしてこの進行によつてこそはじめて善悪の標準が人間に非ずして神の標準となるため、道徳は信頼と権威をもつに至るのです。即ち絶対善なる神の存在こそ人間道徳の礎であります。

ブルンナーは、「人間の存在から神の存在が失われてしまうと人間は人間性のところどとどまらず、動物性にまで墮落してしまう」という意味のことを申しましたが創世記にあります有名なカインとアベルの物語におきましても、カインが弟アベルを殺害しました眞の原因は、カインがアベルの人格を尊重しなかつた、神が自分も弟もひとしくつくり給うたものであると信じられなかつたという結果によつてであります。即ちブルンナーの言の如く神に対する信仰を失えば人道も失うに至るのであります。

まことに良心・人道といつた我々の内面的な必然性から考えてみましても「神の存在」は証明されるのであり、神を信ずるといふことは理性に訴えても正しいことなのであります。信仰とはただ漠然と信じているのではありません。信仰は決して理性に反しないのです。私たちは理性を通じて神に至ることができます。そして理性を通じて本当に理性そのものを基礎づけるものは神に対する信仰であり、良心に立脚して良心を支えるものこそそれは神の存在なのであります。

● 以上、私は「神の存在」についていろいろと申上げて参りましたが、ある人々はそれは単なる観念論に過ぎないではないかと申すでありましょう。そこで人間の思考でなく私は更にこの問題を神の啓示の歴史によつて即ち聖書の示すことについて考え、

絶対に神が存在される証拠を学んでみることに致したいと思います。私達は罪人であり本質的にいつて、真の、神の存在認識は神の側から先手を打つて人間に語りかけた舞うたことによらなければなりません。

神はアブラハムを選び、モーセを選び、預言者たちを選びそれらの人々を通して語られました。旧約聖書はそれらの祖先が如何に神のことばを聞き、神と相語つたかそして彼らが如何に神にみちびかれてその生涯を送つたかを示す記録であります。換言すれば旧約聖書は神の存在を示す記録であります。新約聖書のヘブル書一章一節に「神むかしは預言者等により、多くに分ち、多くの方法をもて先祖たちに語り給ひ」とありますことは以上の旧約のことを示すものなのです。しかし新約聖書ヘブル書は更に続きまして二節以下に、神は時みちて僕たる預言者によらず、永遠より父なる神のもとに在し給う御子イエス・キリストをつかわされ我らに語り給うた。イエスは神の栄光のかがやき、神の本質の像であり、我らの罪の潔めをなし給うたのであることなどを述べております。イエス・キリストは神の子であるが人の罪を救わんとして人のかたちをとられました。即ち新約聖書は神がイエス・キリストという具体的な人間を通して絶対なる神の存在を示されたこと即ち神がイエス・キリストを通して人間世界にあらわれ給うたことを私たちに伝えているのです。これこそ有力なる「神の存在」の証拠であり、絶対なるものと信じます。

更にヨハネ伝一章十四節をみますと「言は肉体となりて我らの中に宿りたまへり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とに満てり」とありますが「言は肉体となりて我々の中に宿りたまへり」とは具体的に申しますならば見えない神が見ゆる神として即ちイエス・キリストが人間の中にキャンプ生活をされたということでもあります。そしてキャンプ生活でありますからイエスのことは日常生活にまで直接にはつきりとみることができた訳であります。

まことに、ヨハネ伝一章十八節の教える如く、イエス・キリストその方のみが遺憾なく完全に神を顕わし給うたのであります。

キリスト教はたゞ漠然と「神の存在」を述べその教えを説くが如き抽象的なものでは決してありません。以上のことでもわかるように神の存在は確実です。

キリスト教は具体的に我々の生活の中にキャンプされたイエス・キリストを以て最も確固たる「神の存在」の証拠として信じていくのであります。イエスはヨルダン川にてバプテスマのヨハネより洗礼を受けられました。そして水より上るとき、天がさけ神の御霊、鳩の如く降るのを見られ、イエスは御自身が神より遣わされた救主なることを体験されました。そして受洗後、イエスは荒野に於て四十日、四十夜サタンと悪戦苦闘をされました。神の子イエス・キリストが人類を救わんとし給うたことはサタンにとり死活の大問題でありますから、サタンは必死になつてイエスに対抗し執拗にイエスの神性を否定せんとしました。この時もしイエスが神の子に非ずして単に神の子なりと誇大妄想したる人間に過ぎないならば、かかるサタンの誘惑に平気であつたでしょう。

しかしイエスは理性をもつておられました。ですからサタンとの激しい対決にイエスは荒野で苦しまれたのです。だが、イエスは単なる理性の人ではなく神の子であります。

イエスはサタンとの激戦に、あのヨルダン川において受けた神の子たるの自覚と信

仰とを以て貫かれ、左端を完全に撃破し輝かしき勝利をおさめられました。このイエスの、神の子として人類の罪を贖い、神の国を達成せんとする自覚と信仰とはその後の生活に於ても徹底的に貫かれ、神の国の福音を宣べ伝えて止みませんでした。そしてイエスはこのため十字架にかけられました。然し神の御心に絶対従順でありました神の子イエス・キリストは神の大能により復活せしめられ、今、父の右に坐し神の栄光に生きておられるのであります。

皆さんは新約聖書に示された歴史的な真の人間として神に絶対服従しいと小さき一人だに亡びざらんがため進まれたイエスの姿イエスのことば、否イエスそのものをどう受けとりますか。

イエスは単なる宗教家ではありません。

イエスこそ、神のみもとに至る道であり、イエスを信ずる者のみが神を信じ得るのであつて人間の思考、思推、議論によつては確実なる「神の存在」を証明することはできません。

新約聖書は冒頭より巻尾に至るまで神はイエス・キリストにおいてのみ認められることを記しています。

イエスを知らずしては如何なる人間といえども真の神の存在を知り得ません。神は宇宙万物をつくられました。イエスを知れば神を知ることができます。

「神の存在」のゆるがざる絶対の証明はイエス・キリストであります。

皆さん、我々人類に課せられた絶対の使命はイエス・キリストを信じ、神を信ずることにあります。

イエス・キリストをどう受けとるか、イエスを信ずるか、否か。

このいずれかによつて我らは永遠の生命と滅亡への道にわかれていくのであります。

(終り)

第二十号 (1958年3月)

武士道の誤解

半田 梅雄

内村鑑三先生が、日本的キリスト教ということを唱えてから、日本の武士道は新しい角度で高く評価されて来たように思われる。

英国に騎士道、日本に武士道ありと、何事にも大英帝国を引合に出す皮相な物織りが甚だしく幅を利かした時代もあつたが、たしかに日本の武士道の長所は、キリスト教の実践道徳に似ているところが多い。戦時には主君のために身命を賭して戦う。平時には清廉潔白、質素勤儉の生活、そして極めて礼儀正しい態度などは、何でも舶来ものを頭から尊重して得意がついていた明治大正のハイカラ組にはよい手本であつたであろう。

しかし、戦時には主君のために身命を賭して戦う態度を「我キリストと共に十字架につけられたり」(ガラテヤ二の二〇)「我にとりて生きるはキリストなり。死ぬるも

また益なり」(ピリピ一の21)云々というパウロの言葉に比較して、主君をキリストに移しかえれば、そのままキリスト教信仰の真髓が会得されるように考えるのは甚だしい誤解である。

このような誤解の原因は、まず武士を、農工商の職業と同列に考えるところから来る。なるほど武士階級は、平時において、行政権と司法権を一手に握つた特権公務員的存在に違いなかつた。しかし、武士階級成立の楔機には、支配権の争奪によつて民衆の上に君臨し、自己の野望と生活を満足させるための白昼強盜的要素がなかつたと誰が言い得よう。

やくざやばくち打ちも良民に対するダニであるが食に飽きれば結構強きをくじき弱きを助ける侠客という変つた存在にもなる。彼らの仲間内におけるおきての厳しきは驚くべきものがあつて、その点では武士以上のもの堅ささえある。

やくざがどんなに義理堅いからといつて、また親分のために 生命を捨てるからといつて、それが賞揚されてよいことがらであろうか。武士はもちろんすべてがやくざと同じではない。しかし、戦国の武士は明らかに白昼強盜的要素をその生活目標の中に持つていたのである。

武士にもやくざにも共通する捨身的服従はどこから来たのであろうか。それは飼い主に忠勤をはげむ犬のような盲目的、感情的な理由によるものが多いのではあるまいか。ただそれが次第に磨かれ、高められ純化していつて、ついに武士道は平時においても一つのすぐれたモラルとして、華の如く世に伝えられたのであろう。

キリストにおける捨身的生存はこれらと全く質を異にしている。

武士がキリストに帰依すれば、人を殺す武士であることをやめなければ、眞の信仰を全うすることはできない。今日の国防のための軍人と雖も全く同列である。キリスト教の義は、神の前に、この世の一さいの不義を認めない峻烈絶対的なものである。単なる捨身ですべてが終るのではない。一方に義であつて他方に不義であるような、「相対的な義」の協力者であることを自覚しない限り、キリストは我らの主とならない。これに対してある人は言うだろう。イエスは、百人隊の隊長の信仰をほめがた、職業をかえろといわなかつたではないか。またパウロは、ピレモンに、奴隷解放をクリスチヤンの道徳としてすすめなかつたではないかと。たしかに聖書はそのような記録を残している。

しかし、もつと大切なことは、荒野におけるイエスの苦斗であり、ゲツセマネにおけるイエスの慟哭である。イエスが人間であることの根底までゆすぶり動かされたこの事件は、イエスの公生涯の始めと終りにある関門であつた。この二つの関所を通つて、キリスト教ははじめて地上の一さいの勢力に勝利を取めることができたのである。

人が生れながらの人間のまゝで、勇壯剛健、清潔勤勉な道徳を養い、一目かん急の際に、身命を君国に捧げさえすれば、武士の手本は成立する。だが、勇壯剛健、勤勉清潔の如き徳目を身につけることが、いつたいどれだけ我々の生命を延長するのに役立つのか、さらに言うならば、特攻隊的死、あるいは衆を頼みとした愚劣な物よこせ運動に、徹底的な反抗を、おのれの良心のみを支えとして、やりとおすことができる者は一体誰なのか。

キリスト教における捨身的生存とは、眼をつむつて死に飛びこむことゝ全く正反対

の、眼をみひらいて屈辱的死に耐えて生きることである。どんな弱虫でも青酸カリで死ぬことはそんなに難かしくはない。しかし、あらゆる苦痛に耐えて神の義を生き抜くことは決して容易ではない。さらに肉体の死を超えて、永遠の生命の信仰に生きることは、もつと難かしい。その難かしい生の初穂となられたのがイエスであり、彼の十字架の秘義であつた。

「もはや我生くるにあらず、キリストわが内にありて生くるなり」(ガラテヤ二の二〇)というパウロの言葉は、この生のことをいうのであつた。それは決して本能的生への執着と同一ではない。むしろその反対に、神を信じ、キリストにより頼む者にのみに了解される捨身の生存の体験から出た言葉である。

この意味から我が武士道は一度捨てられねばならぬ。鴻毛の如きかるき生命を万物の支配者の手に帰するとき、日本人の眞の生は始まるのである。

第二十一号 (1958年5月)

友を送る一別れは真に会うのはじめである一

半田 梅雄

私たちの家庭集会在、今までに加え得た友の中で、最もすぐれた教友の一人であるK君を、私たちは、今社会へ送り出そうとしている。

K君は、ほゞ一ヶ年を私たちと共に過した。その間、彼が私たちに示した信仰生活、講義、友情は、私たちに実に大きな力を与えた。昨年夏以来でも、私たちは既に二人の教友を世に送り、今K君を送り出す。これで残る私たちは、一姉妹と私たち夫婦だけのグループになるわけである。グループとしては最小であろう。しかし、私達は許される限りは集会を続けてゆきたいし、又許される限りは続くものと信じている。

K君に対して私は深い期待と愛と尊敬を持ち続けて来た。恐らくこれは生涯変るまいと思う。だから、私がK君に対していただいた夢が、共同伝道であつたり、共同事業であつたりしても、決して不思議ではないのである。

K君の今度の東京行は、N先生の強い要望によるものであつたが、私の方が先に話をしておれば、あるいは私の希いは達せられたかも知れない。しかし、私はあえてそれをしなかつた。勿論、君の東京行は、N先生の要望のみで決定されたのではなく、K君自身が、深い祈りのうちに定めた純粹で独立の決断によることも疑いを容れない。たゞその端緒はあくまでN先生の呼びかけによることは事実であつた。それに対して、K君に職業補導をした先輩たちは、君の有能をひとしく惜しんで、極力これに反対し、茨城に就職して止まるようにすすめたのであつた。私にとつても後者になることが望ましかつたのであるが、私はそういう自身の希望も期待も一切退けた。これは私の性格の臆病さの故もあろうが、そうすることが最も正しい態度であると信じられたからである。それに、何よりも見逃してはならないことは、K君がN先生から委嘱される仕事は、純粹に信仰的な立場を必要とするもので、普通の意味の就職や、社会復帰とはその性質が大いに違うのであつた。社会的にはなばなしい事業ではなく、むしろ困難極まりない仕事であるが、それだけにK君にとつて、ライフ・ワークになると信じら

れるものであつた。

とにかく、K君は三日の後に東京に行くことになつた。前の頃の私だつたら、顛倒するような離別感に身をさいなまれたであろうが、今度は不思議とそれが無い。今度というより愛する教友に次々別れても、この頃の私は、それを淡々と送れるようになった。それは、去脱的な虚無感や、あきらめの故ではない。人一倍感情的な人間である私に、別れの淋しさが失くなることなどあろうはずもない。にもかゝらず、私は今静かに友を送ろうとする。私の信仰生涯に、再び共同して集会を持つことなどは許されそうもないほどの良き友を！

私はそれでよいのだと思う。人の一生に、劇的な瞬間はそう多くはない。そして、キリスト者の生涯には、もはや真の意味の別離はないのだと思う。（例え死別する時でも）会うがみこゝろならば、別れもまたみこゝろである。しかもそれは、断じて佛教流の生者必滅、会者定離のような意味ではない。私たちクリスチャンにとって、別離は、さらによき日に再会する希望を意味する。下世話に、「会うは別れの始め」という。しかし、私たちには、「別れは真に会うのはじめ」なのである。

友よ！

かの地において、いよいよ雄々しかれ！

(一九五七、三、五 旧稿)

第二十二号 (1959年10月)

御許し下さい

松本 文助

水戸無教会誌が足踏みのまま一年半余になつてしまつた。この停頓の原因に、私は最も重い責を負わねばならない。それは私のことで、ある事件があつたとき、密かに水無誌の原稿をしばらく休むことにしたのであつた。然しその根底には原稿が書けないということもあつたのである。

水無誌の続刊については、昨年十一月頃の日曜集会で話もまとまつて居り、既に桜井兄は原稿を出されたのであるが、そのまま現在に至つていたり、或は購読料前納、またこの誌の為に寄附された諸兄弟もあるので、その責任をせめられていたのであつた。

六月のある朝私は何時もより長く祈りつゞけた。水無誌の続刊が出来ますよう御願ひしたのであつた。処が不思議にも二、三日過ぎて突然未知の療養中のオ兄から国立水戸病院の重患の方達に心をこめた贈物の依頼があつた。そしてその依頼状の文面に水無誌の発刊を祈り且つ待つて居るということがあつた。私はオ兄の愛に感激すると共に水無誌の為に人知れず祈つて下さつた兄弟のあることに、恰もパウロが夜幻影の中に一人のマケドニヤ人の招によつて伝道の道が開けたこと(使徒行伝一六の九—一五)が、思い浮かんだのであつた。ここに再び日曜集会の諸兄弟と話し合い再刊の運びとなつたのである。

その話し合いの別れ際に石原兄が「手紙を書くつもりで」と云われた。全くお互に

手紙は書くのであつて、手紙を書かないことは変則である。然し私はいざ原稿を書くとなると、聖書の知識がないとか、文章が出来ないとか、無学だとか、健忘症であるからとか、種々な理由をつけ書こうとしない、そしてその反面何とかして、上手に書こうとするので愈々行詰つて書けなくなつてしまうのであつた。そして人前では謙遜の形に、或は遠慮の形にみせかけてしまうのであつた。斯くして私は、原稿を書くことばかりでなく凡ての行動に於て、深く考えさせられたのである。現在の自分、過去に於ける種々な経路が、貧弱にもせよ、累積されている自分、これを他と比較して、劣等感を抱き、卑劣となり、引込思案となり、その行動を停止してしまうことは、はたして許さるべきであらうか。

咄！神は人を創造し、そして萬人救済の為に、その独り子を十字架につけ給うたのである。神様は、母の胎内に人がつくられない先に、そして生れない先から之を知り、総てを予定しておいて、神様全愛を注いでいらつしやるのである。今やお前は「神から受けて自分の内に宿つている聖霊の宮であつて、もはや自分自身のものではないのだ」！（コリント前六の一九）

葡萄畑の労働の譬（マタイ二〇の一―一六）で知る如く、神様には、この世の総ての差別は問題視されないのであつて、寧ろその差別は顛倒されているのである。ただ問題は神様に召されたままの状態、神様の栄光をあらわすべく行動すべきである。それを自分は自分のものの如く考え、謙遜や、遠慮を以てその行動を逡巡するが如きは、神様から託されたタラントを地の中に隠す事と同様である。私は神様の前にこの怠け者の、悪い僕よ、何の役にも立たないと外の真暗闇に放り出されて、そこにわめき、齒ぎしりする、自分の姿を見て戦慄したのであつた。「神様御許し下さい」と赦免を乞うて倉皇としてこの告白をペンにした次第です。

第二十三号（1959年12月）

“水戸無教会”復刊を喜ぶ

小貫 武寿

“水戸無教会”誌が復刊したことは何よりも嬉しいことである。私もこの数年間は少しく商売に傾き、聖書の勉強をおろそかにしてしまった。聖書とソロバンをどうも両手に持つてしまうのである。そしてソロバンの方に傾き勝ちであつたのである。

勿論ソロバン抜きには商売は出来ない。いろ？？失敗を繰返して行くうちに本当のソロバンがはじける様になるのかも知れない。要はソロバンをはじく心が問題である。

しかるに、今迄私の心は千々に乱れ、現実問題に迫り廻されて深く反省する余裕を持てなかつたのである。私の周囲が余りにも余裕なくせせこましいことは事実である。又この様な環境で育った私は、やはりせせこましい性格であることもよく認識している。しかしよく反省して見ると、そんなに焦っても百歩は百歩五十歩は五十歩である。焦って自分でどうにかしようと思うとかえって泥沼に落ちる。それよりはや

はり信じて待つと云う、素直な信仰心こそ大切であると云うことを最近痛感したのである。それにしても人間と云うものは弱いものだ。イエスの最愛の弟子であったペテロでさえもイエスがとらえられた時その弟子であることを三度も否定したことは、私にはよく判るような気がする。本当に駄目である。

しからばクリスチャンとして生ぬるい信仰生活を続けなければならないのだろうか。

さにあらず、人に出来ないことも神様には出来る。キリスト生きて居給うならばどうか、此の無用の僕をむち打ち給えそして正しいソロバンをはじけるように導き給えと祈ること切である。

第二十四号（1960年2月）

生活の心配をするな(二)

半田 梅雄

(マタイ六・二五～三四、ルカー二・二二～三一)

空の鳥と比較して、人間がいかに尊いものであるか。その尊い人間を、空の鳥さえ養い給う神が、どうして愛しかつ養い給わないはずがあるろうか。だから、命以下、身体以下のことに心を煩わして、かんじんのことから眼をそらしてはいけない。というのが、前号で学んだマタイによる福音書六章二五節二六節の概要であつた。続いてイエスは、人間の心配や努力がいかに的はずれなものであるかを、前節同様具体例をあげて説明する。

27だいいち、あなた達のうちのだれが、心配して寿命を一寸でも伸ばすことが出来るのか。

これは実に辛辣な言葉である。取りようによっては、一流の皮肉と言えないことはない。しかしこれは事実である。何人も否定することのできない真理の言葉である。徒らに人生を享樂せんがために、おのれの寿命を一寸でも延ばそうと狂奔しているのが、人の世の実相とってよいからである。人生をこの世限りのものとする人類にとって、これは当然の結果といえよう。しかも現世主義の落ち込む必然的な結果は、死であり滅亡であることはいうまでもない。

“出来るのか”という一語にこめられている絶対的なひびきを読者よさとれ。

次の二八節は二六節にほぼ類似している。

28また、なぜ着物のことを心配するのか。野の花の育つのをよく見てごらん。苦勞をせず紡ぐこともしない。

二七節は命のことにふれ、二八節は身体のことに関していう。しかも子供にもわかるように平明で懇切である。二六節の空の鳥といい、本節の野の花といい、生活問題に汲々としている人間と比較して、対照がきわめてあざやかである。少しでも上等のものを食べかつ着ようかと、いかに人間があくせくしているか、ふりかえって考えてみれば、この言葉の持つ意味は恐ろしい程のきびしきで迫ってくる。人間の目ざして

いるものは、口に文化をいい、手に文明をかざしながら、それは、はかなく消え去る栄華の追及にほかならないのである。

29しかし、わたしは言う。栄華を極めたソロモン王でさえも、この花の一つほどに着飾ってはいなかった。

ここには価値の転倒がはっきり宣言されている。ソロモン王の栄華によって代表される人類文化の方向と価値が、真向から否定されているのである。それは決して質素とか、儉約によって挽回出来る種類のものではない。

これは価値の量の問題ではなく質の問題である。人類が全力を奮って打ち樹てようとしているバベルの塔の粉碎を意味する言葉である。一方はあくなき官能の追及であり、その結果もたらされる墮落と混乱と汚穢であり、他方はこれら一さいの否定によって与えられる神の国の秩序であり、平安と歓喜の来訪である。単純な自然と人生の比較ではない。“しかし、わたしは言う”これは明らかに透徹した真理と深い確信に満ちた者によって発せられた言葉である。話のついでに引用された事例とはわけが違う。この節のみでも何べんか口に誦してみれば、その荘重なひびきは自ら神の独り子イエスを眼前にする思いがするであろう。

30今日は花咲き、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこんなに装ってくださるからには、ましてあなたたちはなおさらのことではないか。信仰の小さい人たちよ！

野の花の美しさ、それは決して絵画的装飾的な意味における美しさを言っているのではないことは、ソロモン王の栄華との比較で明らかである。なぜ野の花は美しいのか。そこには技巧のない、単純素朴自然な美しさがあることは何人も認める。しかし、それだけならイエスの価値判断はさして新鮮味を持つとは言えない。それは実に創り主なる神の栄光を表わすという点において真に美しいのである。人工の美がどんなにすぐれていても、野の花に及ばないのはそのためである。神の栄光をあらわす美しさとは何か。それは生命あるものの美である。考えても見よ、この地上から一さいの生命を失った日の無味乾燥の光景を！暗黒に対する光明のそれのように、生命こそ神の創り玉井しものうちのより偉大なるものではないか。野の草は自らの中に備えられた力によって、美しき花をつける。名もなき野の草といえども、与えられた命の故に、その最善に花を開く。それが美しいのである。何という可憐にして惜しみなき愛の営みであることか！しかもわたしたち人間は、神の創り給いし生命のうちの最大の傑作である。神が最も愛し給うものである。どうして見放されたもののように、あせり、あわてて自らを装い守ろうとするのであるか。“信仰の小さい人たちよ”とイエスはあわれみをこめて言い給う。

31だから「何を食べよう」とか、「何を飲もう」とか「何を着よう」とか言って心配するな。

32それらはみな異教人のほしがるもの。あなたたちの天の父上は、それがみなあなた達に必要なことをよく御承知である。

それらはみな異教人のほしがるものだとイエスは言い給う。真の神を知らない異教人、この世のことしか考えない未信仰の人たちが、生活問題に汲々とするのをイエスはあわれみ給う。しかし少くも信仰によって「天の父上」を知ることの出来た者たち

は、そんなことにいつまでもこだわってはいならないと励まして言われる。「天の父上」は、あなた達に必要なものがわからない程無能な方ではないのだからと。

33あなた達は何よりも先に、御国と、神に義とされることを求めよ。そうすれば食物や着物などこんなものはみな求めずともつけたして与えられるであろう。

何よりも先に、御国を求めよ、神に義とされることを求めよと言う。御国や神の義が何であるかここでは具体的に説明はされていない。しかし、イエスが難かしいことを要求しているのではないことは、いままでの説明で充分である。万人にソロモン王の栄華を求めよというのであれば、それは難かしい。しかし野の花のごとく、全力をつくしておのれに与えられた使命を生きるのであれば誰にでもできる。御国を求めるといふ、神に義とされることを求めるといふ結局はこれにつきるであろう。すなわち、野の花、空の鳥のごとく一さいを神の御手にゆだねまつることである。ひたすらに創り主なる神を信ずることである。荒野の試練より十字架にいたるまで、ただひとすじに神に従いたもうたイエスがそのもっともよき見本である。イエスは人々に語りたまひしことをそのまゝ実践し給うた。すべての人に先がけ、すべての人にまぎって父なる神のみこころを知り給ひしイエスは、神の義の絶対と、神の無限なる愛に従わざるを得なかったのである。神のみ前に立つとき、わたし達人間に一体何が出来るというのか。ただおそれと戦きとをもって、わたしたちは自己の醜き姿の中に縮まらざるを得ない。しかし何という大いなる恩恵であろう。神はこのいと小さき者をもよく覚えて、十分に養い給うというのである。実に感謝のほかはない。そこまで愛されて、なおこの上に何を言うことがあるだろうか。ない。何もなし。ただこの上は御国の成らんことをねがうのみである。ただの一人もこの恩恵よりもれることのなきよう祈るのみである。

付記

こうは言っても棚からぼた餅は落ちて来ないではないかという人々に一言して置きたい。私たちクリスチャンにとって、生きるのも死ぬるのも、一さいは神さまのみ手の中にある。もしわたし達が、働けど働けどなお飢えるというのであれば、わたしはよろこんで飢えようと思う。形は飢死であれ、病死であれ、あるいは事故死であれ、わたしの生命の支配者が奪い給うものを、わたしがいかにもがいてみても、これを延長することは不可能だからである。しかし、わたしはこれをあきらめとして言うのではない。神は必要とあれば、無益な生以上に有益な死を与え給うことを確信するからである。

第二十五号（1960年3月）

巻頭言なし